

「文学的ラディカルの歴史」(ランドルフ・ボーン) —— 翻訳と解題

前 川 玲 子

ここに訳出したものは、ランドルフ・ボーン (Randolph Silliman Bourne, 1886-1918) の自伝的エッセイ「文学的ラディカルの歴史」(“The History of a Literary Radical”) の全文である。「文学的ラディカルの歴史」は、ボーンの死後に『イェール・レビュー』(*The Yale Review*) の1919年4月号に発表された。このエッセイは、文芸評論家ヴァン・ワイク・ブルックス (Van Wyck Brooks, 1886-1963) が1920年に編んだ論文集『文学的ラディカルの歴史及びその他のエッセイ』(*History of Literary Radical and Other Essays*) の巻頭を飾っている。ブルックスの編集になる論文集が、ボーンの文化的エッセイ、書評などを中心とするものであるのに対して、『セブン・アーツ』の編集者ジェイムズ・オッペンハイム (James Oppenheim, 1882-1932) が編んだ1919年の論文集『時代に先んじた論文集』(*Untimely Papers*) には、未完原稿「国家」(“The State”) や一連の反戦論文など政治的な色彩の強いものが収められている¹。

1 その後に編まれた論文集には、次のようなものがある。Lillian Schlissel, ed., *The World of Randolph Bourne* (New York: E. P. Dutton, 1965); Olaf Hansen, ed., *The* ↗

アナーキストや過激派への弾圧となったヘイ・マーケット事件の年に生まれ、第一次世界大戦の休戦直後に 32 歳で世を去ったボーンは²、激動の世紀転換期を駆け抜けていったアメリカ知識人の一人だった。ニュー・ジャージー州のブルームフィールドで生まれたボーンは、高校卒業後、自動ピアノの音譜製造工房で働いた後に 23 歳で奨学金を得てコロンビア大学に入学した。学部時代に文学から社会学にその専攻を変え、1913 年に社会学で修士号を取得した。在学中から『アトランティック・マンスリー』などに寄稿し、文学論、人生論、若者論など独自の領域を開拓していった。卒業後、再び奨学金を得て一年間大戦前夜のヨーロッパをめぐる後、1914 年には創刊されたばかりの『ニュー・リパブリック』のスタッフに加わった。コロンビア大学の恩師だった哲学者ジョン・デューイや歴史家ジェイムズ・ハーヴィー・ロビンソン (James Harvey Robinson) などの当時有数のリベラル知識人を集めた『ニュー・リパブリック』で、ボーンは主に進歩的な教育改革や都市計画の必要を謳った

\\Radical Will: Randolph Bourne (New York: Urison Books, 1977).なお、Brooks の編集になる論文集 [Van Wyck Brooks, ed., *History of Literary Radical and Other Essays* (New York: B. W. Huebsch, 1920)] は収録論文に変更が加えられ、*The History of a Literary Radical & Other Papers by Randolph Bourne* (New York: S. A. Russel, 1956) として再版されている。なお、短命に終わった雑誌『セブン・アーツ』(*Seven Arts*, 1916-17) とボーンの関係については、James Oppenheim, “The Story of The *Seven Arts*,” *American Mercury* 20 (June 1930): 156-64 に詳しい。James Oppenheim, ed., *Untimely Papers* (New York: B. W. Huebsch, 1919) の序文でオープンハイムは、「二年前にボーンが書いたことはすべてその後の出来事によってその正しさが証明された。この一匹狼の孤高の叫びを今は皆が合唱している。そして、多くの先駆者がそうであるように、彼は自分の真実が事実となるのを見る前にこの世を去ったのである」(p. 7) と述べている。彼の死が早すぎたのと同様に、その先見の明のある論文も時代の先を行きすぎていたという意味で *untimely* という言葉を選んだと思われる。

2 1918 年 11 月 11 日が連合国とドイツとの休戦の日。ボーンは、当時蔓延したインフルエンザにかかり同年 12 月 22 日に死亡した。

論文を書いていた。しかし、大戦を基本的には領土をめぐる国家間対立および資源と市場分配を争う資本家間の争いとして見たボーンは、自由と民主主義の大義を掲げるアメリカの参戦に強く反対した。そして、戦争を国内改革のためのプラグマティックな手段になりうるとして参戦を擁護したデューイを始めとする進歩主義的な知識人を痛烈に批判したのである。ボーンはその反戦姿勢のために、次第に『ニュー・リパブリック』を始めとする主要な雑誌への発表の機会を失うようになった。1917年のアメリカ参戦から1918年の死に至るまでの時期は、ボーンにとって孤独な内省の時期とならざるを得なかったのである。同時に、それは、ボーンがプラグマティックな進歩主義的改革者と決別し、ブルックスら文学的な友人との親交を深めた時期でもあった。その短い生涯のなかで、文学と政治の両面から自己の思想を深めていったこの時期を、あえてボーンの円熟期と呼ぶこともできるであろう³。

ボーンは、ブルックスやオッペンハイムらと共に、第一次世界大戦前のニューヨークを中心とした「若き知識人たち」のグループを形成していた。ボーンの実験者エドワード・アブラハムズは、その著書『叙情的左翼』の序文で、ボーンやその仲間たちは、「文化的ルネサンスを通じて世界の再生を求めた……モダニストとして自分たちをみなしていた」と書いている⁴。それぞれの政治的

3 ボーンの伝記には、Louis Filler, *Randolph Bourne* (Washington, D.C.: American Council on Public Affairs, 1943); John Adam Moreau, *Randolph Bourne — Legend and Reality* (Washington, D.C.: Public Affairs Press, 1966); Sherman Paul, *Randolph Bourne* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1966); James Vitelli, *Randolph Bourne* (Boston: Twayne Publishers, 1981) などがある。なお、最近のボーンの研究書としては、Bruce Clayton, *Forgotten Prophet: The Life of Randolph Bourne* (1984; rpt. Columbia: University of Missouri Press, 1998); Casey Nelson Blake, *Beloved Community: The Cultural Criticism of Randolph Bourne, Van Wyck Brooks, Waldo Frank, & Lewis Mumford* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1990) などがある。

4 Edward Abrahams, *The Lyrical Left* (Charlottesville: University Press of Virginia, ↗

スタンスの違いにもかかわらず、夭折したボーンとその最初の論文集を編んだブルックスとオープンハイムに共通するのは、「真正正銘の文化」を創りあげていきたいという独特の気負いとでもいったものである。初期のボーンはその情熱を「文化的愛国心」と呼び、「愛国心の中でも最も無害なもので、かつ文明が真の命を保つためには絶対に必要な」ものと形容した⁵。しかし、第一次世界大戦が始まり民族的ナショナリズムの暴走に衝撃を受けたボーンは、トランスナショナリズム論を唱え、コスモポリタンな文化の創成の必要を唱えるようになり、初期の文化ナショナリズム的立場から遠ざかっていった。さらに、遺稿となった「国家」では、戦争を糧としてのみ延命する国家と、その支配下で「群れ」の一部となって総力戦に動員され疲弊していく大衆の姿を、独特の悲観主義的、かつアイロニカルな色調で描いたのだった⁶。

「文学的ラディカル」の歴史」は反戦的立場によって次第に論文の発表の場を失っていったボーンが、自分自身の過去を振り返って書いたと思われる作品で

↘1986), xi. なお、ブルックスやポール・ローゼンフェルド (Paul Rosenfeld)、ルイス・マンフォード (Lewis Mumford) などを含む第一次世界大戦前のニューヨークを中心にした「若き知識人たち」の代表としてボーンを扱っている知識人史として、Thomas Bender, *New York Intellect: A History of Intellectual Life in New York City, from 1750 to the Beginning of Our Own Time* (New York: Alfred A. Knopf, 1987) などがある。

5 Randolph Bourne, “Our Cultural Humility,” *Atlantic Monthly* 114 (October 1914): 503–507.

6 ボーンの思想的変遷については、拙稿「ランドルフ・ボーン再考——第一次世界大戦下のアメリカ知識人」『アメリカ史研究』第27号(2004年)20–34; 田野勲「国家・戦争・アイロニー：ランドルフ・ボーンの *Untimely Papers* を中心に」『言語文化論集』(名古屋大学)27巻1号(2005年)91–108などを参照されたい。他にボーンを扱っている邦語文献として、本間長世『思想としてのアメリカ』(中央公論社、1996年)、遠藤泰生「多文化主義とアメリカの過去——歴史の破壊と創造」油井大三郎・遠藤泰生編『多文化主義のアメリカ——揺らぐナショナル・アイデンティティ』(東大出版会、1919年)などがある。

ある。しかし、ここには時事的な問題に対する言及は一切なく、また、ボーン自身の家族関係や友人との関係などが具体的に示されているわけでもない。自伝的エッセイとして読もうとすると、普通の自伝を形成するいくつかの要素が欠けていることがわかる。まず、一人称で作家が作家自身について語るという形式ではなく、ここでは、「わが友ミロ」について同じ学校に通ったある人物が語っているという形で書かれている。こうした小説的手法を使っているのは、もしかしたらボーンが自伝の小説あるいは教養小説のようなものとしてミロの伝記を書き始めたことを示唆するのかもしれない⁷。しかしミロの中学か高校の友人の語り手がなぜミロの知的発展のすべての段階を知っているのかについては不明である。最後のほうでは、視点的人物であるミロの友人は消滅してしまって、ミロの現時点の知的到達点が、ボーン自身の述懐のような形で語られている。ボーンは単にこれを個人的な原稿として書き溜めたのだとすれば、その小説的技巧の破綻を云々することは無意味かもしれない。とはいえ、彼がなぜより一般的な一人称の自伝を書くかわりに、あるいは三人称の自伝的小説を書く代わりに、あえて友人によって描かれた「ミロ」を書こうとしたのかには興味をそそられる。

自伝を客観的な三人称を使って描いたヘンリー・アダムズ（Henry Adams, 1838-1918）の『ヘンリー・アダムズの教育』（*The Education of Henry Adams*, 1907）について、ジョン・カーロス・ロウは次のように述べている。

7 ボーンがこの時期に自伝的小説を書いていた可能性は、死後に発表されたエッセイ「自伝的一章」（“An Autobiographical Chapter,” *The Dial* 68 (January 1920): 1-21 [reprinted as “Fragment of a Novel,” in Brooks, ed., *History of Literary Radical*, 300-343]）において、彼の幼年期がギルバートという6歳の主人公に託して書かれていることから窺われる。ブルース・クレイトンは、ボーンは「文学的ラディカル」の中で自伝的小説の第二章を書いたのだと示唆する（Clayton, *Forgotten Prophet*, 249）。

アダムズは、『教育』を自伝とは考えないように」と主張したが、一九一八年に
公刊された同書には、「ある自伝」という副題がついており、アダムズの才能に傾
倒する批評家たちは、この「誤り」をなんとか正そうと努力し続けてきた。しかし、
「自己の人生を書き表わすことは不可能だ」とする、最も前衛的な「反自伝」の立
場に立ってさえ、『教育』は、本質的に「近代的な自伝」ということになる。この
作品がわれわれの文化的な記憶の中心に位置するということは、現代アメリカ文化
の原型的な語り部としてのヘンリー・アダムズに、われわれがいかに魅了されてい
るかを物語っている⁸。

最初私家本として出版され、ボーンの死んだ年に公刊されたアダムズの自伝を、
ボーンが読んだかどうかは定かでない。しかし、啓蒙主義的な理性の時代にもっ
とも親近感を感じる一方で 20 世紀の孕む混沌の気配を敏感に感じ取ったアダ
ムズの学際的知性に、ボーンが自己の知的発展の一つのモデルを見出していた
としても不思議はない。歴史家、小説家、政治的ジャーナリスト、文芸批評家
としてのアダムズは、アメリカ的な「文人」の一つの型を示していたといってい
てもよい。アダムズと同様にボーンにとっても、自伝を書くという行為は、個人
の知的発展の歴史を記録し、さらには一つの時代の衣装をまとうことを強いる
「教育」とそこからの「脱教育」のプロセスを綴ることを意味していた。社会
学者デイヴィッド・リースマン (David Riesman) が示唆するように、こうし
た心的姿勢は、内省、自己啓発そして人格形成を重視する 19 世紀の「内部指
向型人間」(inner-directed person) に共通するものだったといえるかもしれない。
アダムズの教育の「失敗」を語る三人称の語り手も、ミロの教養教育への
イニシエーションと、そこからの離脱を語る友人たる語り手も、ともに自己の
知的発展を客観的に省察しようとする歴史家アダムズの視点、あるいは批評家
ボーンの視点である。他者としての自己を分析する主体は、その他者をアイロ

8 ジョン・カーロス・ロウ著 佐々木隆訳「ヘンリー・アダムズ」エモリー・エリ
オット編／コロンビア米文学史翻訳刊行会訳『コロンビア米文学史』(山口書店、
1997 年) 841 頁。

ニカルな距離感をもって見つめようとするのである。

アダムズが妻の死といった悲劇を自伝の中で言及せず、ただ語られざる出来事として最後まで沈黙するのと同じように、ボーンの自伝的エッセイでは、父の不在や自身の身体的障害については一切触れられていない。文中で一箇所だけ、ミロは「頭の良い小さな男の子」だったとなにげなく書かれているが、ボーンは、出産時に行われた手術の失敗で顔に歪みを持ち、さらに幼少期の脊髄肺炎のために背中が曲がり、発育も止まってしまうという障害をかかえていた。さらに、自伝には家族や生まれた町のことなど具体的な叙述はなく、本に囲まれ古典を学びビクトリア朝的な中流階級の生活をしていたというおおまかな印象を与えるのみである。ボーンはもともと、祖父母をメイ・フラワー号の時代にまで遡ることのできるアングロ・サクソンの出自であった。しかし、事業に失敗した父親は母親の実家に経済的に依存するようになり、ついには家を出ていくことを余儀なくされる。身体的欠陥、父の不在、大学進学への財政的援助を断った成功者の叔父への反感は、ボーンの疎外感や権力者への反逆的精神を形作る要因であったかもしれない。だが、ボーンがこの自伝的エッセイでそれらに触れなかったのは、故意の隠蔽というよりも、自伝を心理的な内面の吐露ではなく、知的成長および人格の完成の記録と考える 19 世紀的伝統を引きずっていたからであろう。彼はこの作品の最後で、古典教育から離反したミロが最後に新しい姿勢で古典に立ち返る様子と、教養主義でもなく、「プロパガンダ」でもない真の文化と批評精神の必要を感じる姿を描いている。そこには、ボーンが崇拝したロマン・ローランの教養小説『ジャン・クリストフ』に見られるような、人間の成長と人格の完成への人道主義的でロマンティックな思い入れがあるようにも思える。

遺稿となったこの自伝的エッセイから伝わってくる彼の少年時代は、現代から見るといまだ牧歌的ともいえる 19 世紀末のアメリカを彷彿とさせる。彼が受けた教育はギリシャ・ローマの古典を中心とした重厚な教養教育であり、大学時代の英文科での教育も古典教育とイギリス文学の学習を中心としたもので

あった。ボーンは1914年に『アトランティック・マンスリー』に発表された「我々の文化的屈辱」という論文の中で、マッシュュー・アーノルド流の文化教養主義を「卑屈な従順さ」で受け入れたアメリカの文化エリートを痛烈に批判した。その後も多くの論文で、ボーンは「お上品な伝統」、「ピューリタニズム」、さらには「ニュー・ヒューマニズム」に戦いを挑んだ⁹。しかし、ボーンが「文学的ラディカルの歴史」で語るように、彼は「異教徒としてではなく」、「教会の内部」から宗教改革を試みたルターのような内からの反逆者であったといえる。このことは、ボーン思想全体を考察するにあたっても重要な示唆となるであろう。彼は進歩主義の時代の産物であり、近代の啓蒙主義的エートスを吸い込みながら、近代の生み出した負の部分——テクノロジーの発達による暴力の激化、労働の機械化と自然発生的な共同体の喪失による人間の疎外などを真剣に受け止めた知識人だった。この自伝的エッセイは、反戦論文や「国家」に見られる同時代への冷徹な警告者にして政治的ラディカルとしてのボーンが、同時に「内側から自然にわきあがってくる正真正銘の文化」¹⁰の創造者であらんとした文学的ラディカルでもあり続けたことを物語っている。

なお、翻訳にあたって底本として用いた版は、Carl Resek, ed., *War and the Intellectuals: Collected Essays 1915-1919* (Harper & Row, 1964) の1999年リプリント版 (Hackett Publishing Company) である。Resek は3箇所注をいれ

9 Bourne, "Our Cultural Humility," 503. 「お上品な伝統」の終焉とその後の文学状況を論じた論文や書評には "The Puritan's Will to Power," *Seven Arts* 1 (April 1917): 631-37; "Sociologic Fiction," *New Republic* 12 (October 27, 1917): 359-60; "Traps for the Unwary," *The Dial* 64 (March 28, 1918): 277-79 などがある。「ニュー・ヒューマニスト」の代表格は、ハーバード大学教授アーヴィング・バビット (Irving Babbitt) やプリンストン大学で教えたポール・エルマー・モア (Paul Elmer More) だった。モダニズムや同時代文学の新思潮に異議を唱え、伝統的文学基準への回帰をよびかけた。

10 Ibid., 506.

ているが、加えて、その他当時のベストセラーの名前など現代の読者にわかりにくいところには注をつけた。また、言及された本や人物の邦訳には複数のものがあるので、混乱しやすいものには原語を注に記した。最後に、便宜上、翻訳のなかの注は Resek の注も含め通し番号とし、括弧して底本の注番号を記すことにする。

ランドルフ・ボーン「文学的ラディカル歴史」¹

教養人としては、わが友ミロの文学的遍歴はまったく見込みなしといった状況で始まった。丸太小屋で育った未来の政治家たちも奇跡的に世界の偉大な書物と遭遇するかもしれない。だが、ミロの幼年時代は、ホメロス、ダンテ、シェイクスピアやその他、人類の伝統を形成してきた作家たちのことも知らず過ぎていった。ミロの精神的滋養のために手に入ったのは、聖書や学校の教科書を除いては、遊び友達の貸してくれる冒険譚の類、たとえばスペインやクリミアでのイギリス兵士のお手柄とか、キューバやニカラグアに不法潜入した若い軍人たちの死を賭した冒険とかの話だった。ミロにとって、聖書は絶対床に落としてはいけないと教えられた魔力をもった本、そして、教科書は稲妻の閃光のような断片的情報が集められた理解不可能な代物のように思えた。ミロはけだるそうに、友達から借りた冒険譚にさっと眼を通し、その文学的スタイルを批判することもなかった。あのハックルベリー・フィンやトム・ソーヤーにも、大学を卒業するまで出会うことはなかった。ミロの自己満足に浸りきった家庭に、友達の貸してくれたものよりもっと生き生きした冒険物語がこっそりしのびこんでくることなどはなかったのだ。もっとも、そのうち、『リチャード・カーベル』や『ジェニス・メレディス』²といった当時の歴史小説を読んで彼

1 *The Yale Review* 3 (April 1919): 468-484. [編者 Resek による注 1]

2 『リチャード・カーベル』(*Richard Carvel*, 1899) は、小説家ウィンストン・チャー /

はちょっぴり賢くなり、文学的芸術というのがこの世にあるのだというおぼろげな感覚を持つようになった。ミロの家では、古典は簡単には開けられない書棚のガラス製の扉の向こうに妥協を許さないような厳格さで奉られていた。少なくともホーソンやアーヴィング、それにサッカレー、そしてテニソンやスコットの詩集がそこにあったが、誰もこうした本について議論したりしなかったし、読むことはむろん視線を落とすことすらなかった。ミロの年長者たちは、『アウトルック』、『インディペンデント』、『クリスチャン・ワーク』といった週刊誌を読むので忙しかったし、ミロや妹に『セイント・ニコラス』や『ユース・カンパニオン』³といった子供向き雑誌を与えることで、ずいぶん気前がいいつもりだった。ミロが『緋文字』や『マーミオン』と厳かに格闘しはじめたのは、ガラスの書棚の向こうから黒表紙の本の列が非難がましい眼で彼を見つめているような気がしたからだった。まるでカルヴィン主義が教養の次元へとそっと滑り込み、その厳格な眼差しで彼の無教養を責めるようで、彼の幼い良心を苦しめたのだ。彼が覚えていることといえば、ばらばらと眼を通したこうした

3 ヌチル (Winston Churchill, 1871-1947) の書いた植民地時代のアメリカを舞台にした歴史物語である。また、『ジェニス・メレディス』(*Janice Meredith: A Story of the American Revolution*, 1899) はその副題どおりアメリカ革命を舞台にしたポール・ライチェスター・フォード (Paul Leicester Ford) の作品である。

3 『アウトルック』(*The Outlook: An Illustrated Weekly Journal of Current Life*, 1893-1928) は、『クリスチャン・ユニオン』の後続雑誌。『インディペンデント』(*Independent*, 1857-1921)、『クリスチャン・ワーク』(*Christian Work: A Religious Weekly Review*, 1880-1903) と共に信仰に篤い中流家庭に常備されるような週刊誌だったようである。『ユース・カンパニオン』(*The Youth's Companion*, 1827-1929) と『セイント・ニコラス』(*St. Nicholas Magazine*, 1873-1941) は子供向けの雑誌。前者は、マーク・トウェインやブッカー・T. ワシントンなども寄稿し、年配の読者のためには医学欄なども作り家族全員で読めるように配慮されていた。後者は、一流のイラスト入りで、キプリングの『ジャングル・ブック』やオルコットの作品などが連載されていた。

本の作者たちは、すごく沢山の単語を使い、正体不明の罪や葛藤や情熱について大騒ぎをしていたということだった。こうした感情は彼の想像力をさして刺激するものでなかったので、彼は年長者に一体なんのことをいっているのと尋ねてみる気すら起こらなかった。友達の貸してくれた外国に不法潜入した軍人たちの冒険譚のほうが、はるかにわかりやすかった。

中学校に行き始めると、ミロは文学作品の名前を次々に暗記せねばならず、その夥しい数と荘厳な響きに圧倒された。教室をとりまく書棚の中に納まったシェイクスピアやゲーテやダンテの石膏作りの彫刻は、先生の背後でその存在感を誇示していた。文学の偉大さについて多くのことが言われたが、ミロの学校生活のはじめのころは、音声学や文法の複雑さを理解するのに手一杯の状態だった。ミロが、今まで聖書にだけ感じていたような神聖なものとして文学に接するようになったのは、高校に行き始めてからだった。彼の教養への通過儀礼は、周囲から白眼視されていたが良心的な教師に文学を教わったせいで、一種の宗教的な秘儀となった。ミルトンの『コーマス』やバークの『和解について』などを読み始めて、デッドウッド・ディックとその仲間たちの演じる西部活劇、G. A. ヘンティーの少年向け読み物、そして抜け目のない銀行家を主人公にした『デイビッド・ハルム』⁴などがミロの魂から抜け落ちていくように

4 デッドウッド・ディック (Deadwood Dick) は1887年から97年にかけてシリーズものとして出版されたエドワード・リトン・ウィーラー (Edward Lytton Wheeler, 1854/5-1885) 作のダ임・ノヴェルの登場人物である。サウス・ダコタの金鉱の町デッドウッドに集まる冒険心あふれる男たちは当時の子供たちの人気ものだったらしい。一種のフォーク・ヒーローとして現在でも様々なジャンルでリメイクされている。ヘンティー (G. A. Henty, 1832-1902) はイギリスの作家で、勤勉、キリスト教的価値観、肉体の鍛錬などを重んじる子供向けの本を80冊近く書いて、イギリスおよび北米、また翻訳本はヨーロッパでも広く読まれた。『デイビッド・ハルム』(David Harum, A Story of American Life, 1898) は、ニューヨークの銀行家エドワード・ノイズ・ウェストコット (Edward Noyes Westcott, 1847-1898) によって書かれた、抜け目のない銀行家の人生哲学をつづった小説で、1899年のペ

なると、教養への熱烈な思いが彼のうちに沸き起こり、決して消えることはなかった。最初、この想いは彼を落ち着かない気持ちにさせたという程度のもので、だからといって何かしなければならないというほどのものではなかった。ミロは実際のところ、偉大な書物をむさぼるように読んだわけではなかった。しかし、彼の心は、何百万人という人びとが世界で考えられ言われた最良のものではなく、安っぽく品のない小説を求めているということに対する高踏な悲しみの気持ちで一杯だった。ミロは手当たり次第に、英文学の古典の廉価版を買い、よく理解できないながらある種の忍耐強さをもって読み続けた。

死語となった古典に関しては、それらは母国語の古典よりもはるかに大きな権威を伴って、教師たちから伝授された。1日1時間課せられる4年間のラテン語と3年間のギリシャ語は、アメリカ市民としての自分の将来に欠かせない重要な準備だということをミロは全く疑いもしなかった。そして、彼が今後人生を過ごすことになる世界は、本当に教師がいうように、ラテン語やギリシャ語が年寄りの慰めとなり、趣味を促すものとなり、肉体労働の後の休息となり、人間的な事柄にかんする一般的知識への鍵となるような世界なのだろうかと思ってみることもなかった。ミロの文化的教養の発達を操るという貴重な仕事を一手に引き受けていた、あの大真面目に口をすぼめた女教師たちの知恵を疑うなどということは、日の出を疑うに等しい行為だった。ミロは、ちょっと捉えどころがなかったにしても、とにかく頭のいい小さな男の子で、この頭の良さと大人しさが同居していたせいで、僕たちが一緒に通った学校で、ミロはよい成績をもらったのだった。

あんないい成績をもらうのは、僕たちが教室で熟読させられた本をミロがしっかり自分のものにしていたからだと思信じて疑わなかった。でも後になってミロは僕に、自分は何を勉強していたのか本当のところわかっていなかったのだと話してくれた。ミロにとって、シーザー、ウェルギリウス（ヴァーギル）、

↘スト・セラーだった。

キケロ、クセノフォン、ホメロスなどはヴェールに包まれた霞のような存在だった。彼の精神は、来る日も来る日も、前の日に読んだことを消去して、前の日と同じように理解不可能な将来にむかって突き進んでいく動き続ける現在だった。アエネイスの放浪やキケロが何にたいして激しい抗議を行っていたのかについて、人にわかってもらえるような説明を求められてもできなかったろう。イリアスはさらにおぼろげな存在だった。唯一彼に深い印象を与えたのは、猥褻だといって削除された一節をどこかで調べてきて、ローマの軍神マルスとヴィーナスと一緒に黄金のベッドにいるのが見つかった箇所だということがわかったときだった。シーザーは戦争の渦中にいるようだったし、クセノフォンは小アジアのどこかを、ミロが彼の物語を読むのとほぼ同じくらい長い時間をかけ、骨を折って放浪しているらしかった。後になってミロは思ったのだが、要するに問題は、これらの本が彼の精神にとっては広大な無知のジャングルの中の点滅する光だったということだ。物語の過度な退屈さ自体に驚いたとは記憶していない。彼の良心的な教師たちの例に習って、これらの物語を言語の練習として用いて、ミロは忠実にこつこつと一歩ずつ進んでいった。彼はウェルギリウスとキケロは基本的には、説明しがたいほど奇妙な語順に配置された言葉と言葉のもつれをほぐし、面白くて精緻な二つ以上の要素の結合体からなる文法上の構造物を認知するという「練習問題」だとみなしていた。こうした言葉がどうしてこんなにイライラさせるような語順になっているのか、ミロには全然わからなかった。しかし、こうした文法上の問題を、彼が他の授業で解かなければならなかった代数の問題といつも結び付けていた。ウィルギリウスの言葉は、韻脚に分けなければならない詩の行として配列されていることで、さらに複雑になっていた。ミロには詩のリズムは心地良かったし、独自の調子をもった詩節もあった。しかし、延々と続く情け容赦のない翻訳は詩の構造をバラバラに引き裂いてしまった。ミロの翻訳は非の打ち所のないものだったが、それを書き下ろしたりはしなかったで、彼の目の前に連続した物語が広がっていくことはついになかった。

ミロは古典の英語翻訳本を見たりすることは絶対になかった。彼にとって、それは男の子たちが教師の眼を盗んでやっている死に至る罪そのものだった。ミロが翻訳本を恐怖する気持ちは、聖書のパロディー版にたいして聖人が抱く恐怖にも等しいものだったのだ。ミロが学校を離れる直前に、彼の妹は下の学年で『オデュッセイア』の散文翻訳を読み始めていた。ミロは自分がどんな軽蔑の念で、若い世代が光の殿堂にかくもそこそと入っていく様子をながめたかを覚えている。彼は誰も彼もがラテン語やギリシャ語を勉強できるわけではないことを知っていた。そして自分の知識に誇りをもつことを覚えたのだった。ついに彼が大学への入学試験——ラテン語とギリシャ語の作文と文法、統語法と即読即解、さらにはゴール人の戦い、ペルシアの「進軍」の際の冬霜の情景、女王ディドの別れの言葉、そしてキケロの難詰の翻訳からなる試験——に合格した後でも、彼の異常なまでの古典熱がおさまる気配はなかった。休暇をとっているときでも、彼は田園詩とオデュッセイアの数章を読むと言い張った。彼の家族はその生真面目さにちょっぴりぞっとした。だが、彼には、自分は教養の宝物を天国に蓄えており、その天国では苔や錆がそれを使い物にならなくしてしまうこともなく、泥棒たちが忍び込んで盗んだりもしないという確信があったのだった。

大学に入ると、ミロは容認されているような路線で彼の教養的関心を広げていった。彼はホラティウス、プラトン、リュシ阿斯、テレンティウスを好みみせずに、忠実な良心をもって読んだ。気の利いた新聞各紙に現れるようになったパロディー版のおかげで、ホラティウスが一番ミロの興味をくすぐった。『歌章』の中の「若者よ、私はペルシアの華美を憎む」や「生きるに高潔で」といった出だしの一節⁵が、現代のスラングを使ってパロディー化されている

5 ボーンの原文では、Odi Persicos と Integer vitae がパロディに用いられたとあるが、どのようなパロディーだったのかは不明である。なお、前者がホラティウスの『歌章』（*Carmina*）の第1巻38歌の一行目にでてくる“Persicos odi, puer, appara- /

のを読んで、面白がるべきかそれともショックを受けるべきかミロにはわからなかった。自分たちの立場を分かっている分をわかまえていた穏やかな物腰の教授たちは、こうした古典のパロディーといった不遜な冒険に言及することはなかった。だが、ミロにとっては、それは天動説の信奉者ブトレマイオスの体系にも似た古典中心主義思考にひびをいれた最初の出来事だった。やがて古典を詰め込まれたミロの精神が食傷気味になり、死語という不透明な媒体の中を重い足取りで進んでいくことに疲れを感じ始めるときがきた。もっとすらすらと読めればよかったのだが、いつも新しい単語やスタイルや文法の構造が出てきて、彼を苦しめるのだった。ラテン語の勉強をしていると、常に栄養万点のビフテキを食べているような気になったし、ギリシャ語は栄養分を取り除いて真っ白に精製されたパンのような感じだった。どちらも味気なかった。こうした機知に富んだ詩人や、これ見よがしの雄弁家ども——彼等は一体どういう連中なのか。彼等にはどういう生活の背景があるのか。ミロの人生に彼等はどうか関わっているのか。教授たちはいくばくかの歴史的背景を知っているらしいが、その歴史とはどういう意味をもっているのか。ミロは自分が飽き飽きして不満であることに気づいた。自分でやるよりもましな英語になるように、こっそりと英語の翻訳本を見るようになった。原文のギリシャ語のように霞がかかっておらず、極めて明解な英語訳を見てしまうと、プラトンの屁理屈は退屈なものに思えてきた。棄教とよんでもいいミロの古典からの離反はこうして始まったのだった。

英文学の勉強も古典と似たようなものだった。ミロは分厚い選集を与えられた。例のチョーサーからアーサー・シモンズまでを網羅した、これぞ文芸というお墨付きをもらったような代物だった。その経歴当初には詩人——自分では

“tus” から、また、後者が同じ本の第1巻22歌の最初の一行“Integer vitae scelerisque purus”だということをご教示くださったのは、高谷修先生である。ここに記して感謝申し上げたい。

「現代の歌い手」と表現していたが——としてひとかどの名声を得たいと考えていた教授の指導の下で、そのクラスは、何世紀にもわたる英文学の歴史を、天才たちをつまみ食いし、様々な文学的香りを味わいながら、大またで進んでいった。この作業は、ミロに背広を仕立ててもらうときに見せられるウール地のサンプルが全部納められた仕立屋の見本書を思い出させた。しかし、この場合、学生たちは仕立てあがった背広を見る喜びも味わえなかった。明らかに、学生に期待されているのは、こうした微視的な断片から色々な肌触りや型に親しむということだけだったのだ。偉大な作家たちは、彼の精神を、まるで込み合った通りで出会う不特定多数の人物たちのように通り過ぎていった。好みを醸成する時間なぞなかった。まったくのところ、教授は大真面目で、作家一人ひとりにふさわしい正当な分け前——いわば適切な評価と位置づけを与えようとしていた。もし、読者が過激な形で特定の作家をより優れていると選ぼうとしたり、自分の魂とのいわく言いがたい同調性という理由で優劣をつけたりしたら、偉大な思想や偉大なスタイルを一体どうやって吟味できるのだねとでも教授という風だった。批評というのはそのような主観性をはねつけなくてはならない、学問というのは意図的に自分の主観をとおすようなものであってはならないというのだ。断片的な読み物がきれいに配列された本と、そこで提供される医学的に適量の文学的インスピレーションが、ミロの教育のシンボルとなった。

こうした大学生生活の最初の頃はミロからその教養への忠誠心を奪い取るものではなかったが、こうした月日は彼の意欲を抹殺してしまった。考えられないほど従順だったが、退屈しているのはたしかだった。彼はちょっと知ったかぶりの几帳面な学生として進学してきて、漠然と「文人」になりたいという気概をもっていたのだった。大学に入ったいま、自分は文学的な「がらくた」の収集家になっているような気がした。自分の気持ちををはっきりと定式化してみたわけではないとしても、少なくとも彼にはわかっていたのだ。文学的生活は彼が期待していたほど興味深いものではなかった。彼は冒険を探しもしなかった。

彼が何か文章を書くとしたら、優美な叙事詩か、ウィリアム・コリンズやチャールズ・ラムばりのお上品な批評だった。しかし、こうした広く受け入れられた教養の殿堂の聖人たちは、いまだミロにとって確固たる地位を占めていた。こうした聖典と当時の善良な人々がそのひどさに嘆息した大衆文学との間にはいかなる文学も存在しなかった。古典か大衆文学か、高踏（ハイ・ブラウ）か低俗（ロウ・ブラウ）か、それしか選択の余地はなかった。そしてミロは当然のこととして正統的な天国を選んだのだった。1912年当時を振り返ってみて⁶、英文科のなかで一番人気のあった教授ですら、劇作家のジョン・ゴールズワージーの名前を聞いたことすらなかった。もう一人の教授が、チェスタートンを授業で推薦したことは、英文科ではスキャンダル扱いだった。高踏文化か、さもなくば低俗文化かという狭い考え方からミロを救い出すことになるのは、断じて大学という場ではなかった。もし、ミロが休暇で家に帰ったときに或る講義を聴くという幸運な偶然がなかったら、古典にうんざりし、大衆的なものへの恐怖に凍りついていたミロの教養人としての経歴は確実に終焉に向かっていったことだろう。

ミロの故郷の村の文化講演会（ライシウム）のグループの前に登場した文学的ラディカルこそは、かのウィリアム・ライアン・フェルプス教授⁷その人だった。ミロは振り返って思うのだが、彼のその後の解放は、すべてあの文化的な大胆さを具現した夕べのおかげだった。その講義は近代小説とともに向き合うもので、ハーディー、トルストイ、ツルゲーネフ、メレディス、トロロプといった耳慣れぬ作家たちの名前が機関銃のように繰り出される教授の話に聴衆

6 ボーンがコロンビア大学に入学したのは、1909年の9月。1910年から学内の雑誌『コロンビア・マンスリー』（*Columbia Monthly*）に執筆し始めるが、1912年の秋以降は、『アトランティック・マンスリー』（*Atlantic Monthly*）などに執筆を始めた。

7 ウィリアム・ライアン・フェルプス（William Lyon Phelps, 1865–1943）はアメリカの教育者、文芸評論家である。

は聞き惚れたのだった。こうした名前を初めて聞いた村人に対するその効果は絶大で、その後何日も、こうした作家の本が眠っていた村の図書館のまだ誰も触れたことのない棚は、熱心な村人たちに強奪された感があった。ハーディーの『薄命のジュウド』やトルストイの『復活』は低俗な人間たちの眼に触れないように棚から取り去られていたが、ミロは、なんとかツルゲーネフの『煙』と『処女地』、トルストイの『アンナ・カレーニナ』やトロロプの『救貧院長』、そしてハーディーの『帰郷』や『青い瞳』を見つけることができた。休暇から大学に戻ると、ミロは禁じられた領域も踏査してみた。それはまるで、敬虔だが絶えず何かを求めて落ち着きのない聖人が突然、聖典とみなされていない聖書外伝に出くわしたかのようだった。古典でもなく大衆的でもない新しい世界がミロの前に広がってきたのだ。しかもそれは責められようもない偶然の機会にやってきたのだった。最初はたしかに、この作業には禁じられた冒険の匂いがあった。あんなにも精力的で刺激的な教条を広める宣教師を自負していた講演者には、異端者的なオーラ、あるいは、少なくともずる休みをして遊んでいる生徒のようなところがあった。しかし、ミロ自身は大学に戻ったとき、文化革命家になっていた。彼が正統と考えていたものはがたがたと崩れ落ちた。彼は新しいものと古いものを和解させようとはしなかった。文学聖典の全構造に、ミロはダイナマイトとつるはしで立ち向かった。突如として、アイロニー、ユーモア、悲劇、官能が、自分が理解できる形をもった文学的資質のように思えるようになった。これらは、彼の魂にとって欠くべからざる存在であった。

もしこうした文学的資質がこれまで読んできた本にあったとしても、ミロはそれを体感することができなかったのだ。彼が勉強した選集からは、猥褻なところや不穏当なところが削除されていた。そんなわけでエリザベス朝文学は駆け足で通り過ぎてしまったので、その人間くさい活力が伝わってこなかったのだ。今やミロは、すっかりハーディーのベシミズムに酔いしれていた。トルストイを読むと身も心も締め付けられるようなその感覚がなんともいえなかった。彼が『復活』を読んでいる間にも、彼のとっている文学の授業ではテニソンに

関する詰め込み学習がなされていた。もうがまんの限界だった。彼は猛然と反抗を開始した。文学という聖堂の司祭たちはまったく生彩に欠け、取るに足らない批評的言辞を弄するのみだ。こんな死に絶えた儀式とでもいった文学のコースをミロは断固として拒絶することにした。もっと口の悪い批評家の手にかかったらフェルプス氏ですら、倫理的泥沼にはまって身動きもできない青白く臆病な征服者に過ぎないことは、まだミロにはわかっていなかった。ミロは、時代遅れの文学の聖職者どもに反旗を翻すフェルプス氏の勇ましい進撃が、自分自身の学問的壁を打ち破ってくれたことに感謝していたのだ。

ミロの教養生活の次の段階は、率直な反抗の時期となった。従順な信者だった彼はいまや暴力的な異端者となった。近代小説は、後に近代思想全体に広がっていく亀裂の最初の兆候に過ぎなかった。大学教授などはまったく無用の長物だった。実際、教師との激しい確執が本格的に始まったのは、ミロが新しい大学新聞を立ち上げたラディカルな仲間たちに加わったときである。ミロと友人たちは、単なる文学だと思われたもの全てをかたっぱしからゴミ同然に扱いはじめた。なんらかの社会的目的が光輝いている書物だけが、彼等の情熱を掻き立てるのだった。文学的な香りが許されるのは、高邁で革新的な思想を生き生きとしたものにさせることができたときだった。トルストイは彼等の神となり、ウェルズは高僧となった。チェスタートンは彼等の怒りの標的となった。彼に対する暴力的な攻撃の文が書かれた。もっとも、それもまた、彼の冷やかな逆説の模倣で始まり、脈絡のない怒りの感情を爆発させるものではあったが。彼らの新しい熱情の敵はいたるところにいて、どこから始めていいのかもわからないほどだった。古い律法を破壊しなければならないのはむしろのこと、おまけに、永遠の真理の預言者を称する新手のかなり手ごわい連中がいて、彼等の正体を暴露する必要があった。彼等の学問対象だった19世紀から、こうした吐き気を起させるような道徳家どもを一掃しなければならなかった。一方、若手の教師たちは、こうした反抗をどのように沈静させ、罪びとたちを文化的聖典への信仰の気持ちへと引き戻すかを、額を集めて相談していた。

こうした連中の努力はまったく無駄だった。ミロは、洗練された「文人」になるという野心家から、ラディカルな思想の役に立つような芸術的で文学的なプロパガンダに専念する情熱家へと転向した。こうした転向の結果として、ミロは自分の批評的嗜好にはいかなる基準もないことに気づいたのだった。ミロは長い間従来の文学的基準を敬っていたので、選り好みの習慣がついていなかった。古典と名のつくものは彼にとっては全て良いものであるはずだった。だが、今や古典というお墨付きをもらった本を拒絶してしまったので、ミロは批評家になり、選択をしなければならなかったのだ。彼が読んだ本の中には、思想としては文句なく革命的だったが、文学としてはお粗末というものもあった。ミロの漠然とした嗜好が次第に自己主張を始めた。かつてはいくばくか所有欲が強かったミロは、今や感受性の強い人間になっていた。反抗と自由な思索を誘う文学は、発火点すれすれのところまで彼の精神状態を燃え上がらせていった。彼が読むもの全ては、前とは違って、豊かな色彩を持ち、より鋭い輪郭をもって浮かびあってきた。彼がよりバランスのある状態に到達したときに、ミロは文学形式の力強さ、誠実さの価値、そしてスタイルの新鮮さを感じ始めていた。読むもの全てにこうした資質を探し求めるようになった。やがて、ミロは従順さではなく情熱こそが彼を批判的にするのだということに気がついた。まだ(文学的基準の) ふるいにかけられていない近代の作品に対する自分の感受性や批評眼に少し自信がもてるようになったのだ。

こうした探求は大学からの助けを借りることもなく行われなければならなかった。文学というものを、単に分析したり、批評したり、吸収したりするべき一連の聖典としてではなく、様々な思想の記録として勉強することが流行するようになったのは、ミロが大学を卒業してからのことである。しかし、ミロの時代には旧来の文学研究の習慣に風穴はまったく開いておらず、英文学の批評のサンプルはスティーヴンソンで終わっており、大学の授業でスティーヴンソン以降のものが扱われることはなかった。エリザベス朝時代のものは掘り出されて消毒が施されはしたが、注目度は低かった。一般に人気が高かったのがビク

トリア朝時代の面々だった。彼等は道徳的な健全さと文学的な美しさを融合させているとされ、それ故、若者にふさわしい心暖まる糧として歓迎されたわけだ。講師たちは昔からずっと教えられてきたことは全てよいものだと思なすという敬虔な態度をずっと持っていた。ミロの教師は、線の細い真面目な若者だった。彼のもっとたくましい両親は、どうやら彼の素質を見て取り、この息子の才能を伸ばせば、教養やお上品さにおいて自分たちの野心を凌駕するような知的果実に成長するだろうと考えたようだ。食料店の主としての父親の経歴に夢を持てなかったこの勤勉な少年に、まさにすべての教育の恩恵が注がれたのだった。

親たちの努力の結実であるこの教師は、我々の学部で最も成功した、かつ将来性のある若い講師として燦燦と輝いていた。彼には自分の研究領域が隅からすみまで分かっていた。彼の部屋は、ボール紙でできたインデックス表の厚い束で埋め尽くされており、一枚一枚のインデックスには、授業で詳述する代表的作家たちの作品、生涯、そして死亡月日までが細部にわたって書き込まれていた。さらには、彼等についての評価や解釈に関してこれまで言われてきたことすべてが記されていた。この盛りだくさんの手持ちの品々から数限りない講義やコースを生み出すことができたのだ。彼は執筆に手を染めようとはしなかったが、色々な書き方に精通していて、学生のレポートを添削するときには、ものを書くときに何をしてはならないかを、澁みなく教授した。ミロは大学一年のときはこの教師から一目置かれる存在で、適度な落ち着きがあり、学問的な忍耐力もあるので、将来は自分と同じような天職を得る可能性もあると思なされていた。それだけに、ミロのとっぴな考えにこの教師は度肝を抜かれた。この若者にミロは全くといっていいほど共感を覚えなかった。この教師にとっては、文学研究は芸術というよりも一つの科学であり、他の科学分野と同じように、冷酷な厳格さでその境界線が引かれ、分析がなされなければならなかった。文学は、人格の表現あるいはある社会運動の解釈としてのみ意義があるという考え方に対して、この教師がおずおずと後ずさりしているとミロには感じられ

た。現代文学の話題になるとこの教師は居心地が悪そうだった。学問的な知性には、ミロのゆっくりと育ちつつあった批評感覚に共鳴するものはないことは明らかだった。

ミロとその友人たちは、文学研究を投げ出してしまい、歴史や哲学の教師にしたがって行った。文学の教授たちときたら、こうした知的領域に関して信じられないほど無知だったので、ミロの心は軽蔑の気持ちで煮えたぎった。歴史や哲学には、古臭い文学研究に新しい意味づけをするような有益な手がかりがあるのに、学者たちにはそれを掴みとる知恵がなかった。彼等は、退屈なゲームを繰り返すように旧態依然としたやり方で生き延びるか、あるいは眼前の新しい形式や思想を、畏敬の念を抱きながら茫然自失の表情で眺めていた。所詮こうした連中には、新しいものを理解したり賞賛したりするだけの真の個性が欠けていたのだ。今やミロは、学問に神秘的オーラを感じたり、畏怖の念を抱いたりすることから完全に自由になっていた。彼は、世界を、かくあったもの、またかくあるものとして知ろうとしていた。彼は、これまで神殿に祭り上げられていた文学を現実世界に引き戻したいと思った。あるゆる「教養」は、人生の道筋や社会の偉大な潮流といったより大きな課題に解釈を与える上での助けになるべきなのだった。

ミロのその後の教養生活にも、いくつかの興味深い点がなかったわけではない。学部教育と大学院の建築学の課程を終え⁸、自分の専門領域で活躍するよ

8 ボーン自身は、成績優秀だったため3年間で学部課程を修了し、4年目は奨学金を得て社会学の修士課程を修めた。この伝記的事実から類推すると、ミロは文学、哲学などで学部課程を終えた後、建築学で修士号を得たという設定になっていると思われる。ここで建築学が突然でてくるのはやや唐突の感を免れ得ないが、ボーンがヨーロッパ外遊中に都市計画に興味をもったことや、知人のなかには建築や都市計画の専門家がいたことを考えると、ミロの肖像に自分自身だけではなく、複数の知人のイメージを重ね合わせたことも考えられる。但し、建築学を修めたミロがなぜ後半で書かれている批評家になったのかは説明されておらず、ミロの伝記として

うになると、知的な生活に関する彼の哲学はだんだん整理されたものになってきた。正統的なものの探求が突如として放棄されただけに、最初の正統的教育の影響から自由になるには時間がかかった。だが彼は今、自分の異端思想からも自由になった気がする。つまり、伝統に盲目的に従うのでもなく、我を忘れてプロパガンダに走るのでもなく、本当に自分自身のものだといえるような系統的な鑑賞力を持たないといけなく考えていた。

いまだに続いている昔からの論争は、ミロが自分の現代的な立場というものを再認識する手助けとなった。それは奇妙な古臭い喧嘩であるが、様々な階級および知的傾向をもつ人びとがこの論争に駆り出されていた。雑誌で「新しい教育」への攻撃を読むたびにミロはあらためて感じるのだが、「古典」はしぶとく生き残っているようだ。教授たちのなかには、アメリカの学校での共通したラテン語学習がなくなれば、美的感覚、水準、批評、そして歴史的感覚そのものの概念もこの世から消失してしまうと主張するものもあり、そうした考えはまだ傾聴に値するとされていた。1917年にもなって、専門家たちは厳かに会合を開き、「古典の価値」なるものを、様々な領域での「成功者たち」の証言をもとに弁護しようとしていたのだ⁹。かつてあんなにも無批判に押し付けられた高邁な古典教育が、いまや売薬か何かのように、その有効性の証明を

ㄨのナラティブはこのあたりで終り、これ以降ミロに託してボーンの批評的立場がエッセイ風に語られている。

9 リチャード・ホフスタッター (Richard Hofstadter) はその著書『アメリカの反知性主義』(*Anti-Intellectualism in American Life*, 1963) の中で、古典教育を擁護する大学人と移民流入の現実や経済界の要請などの複数の要因から教育の大衆化を主張する教育改革者との激しい論争が1910代に起こったことを記している。「一九一〇年には九学年から十二学年の公立高校生の四九パーセントが履修していたラテン語は、一九四九年に履修生が七・八パーセントになった」[ホフスタッター著、田村哲夫訳、『アメリカの反知性主義』(みすず書房、2003年) 297-98頁] とあり、ボーンの世代は大学人主導のアカデミックなカリキュラムを受けた最後の世代ということになるかもしれない。

必要としているということをミロは面白がった。銀行の頭取、法律家や編集者は何年も続けてラテン語の授業を受講し、それはさほど骨の折れるものでなくむしろ爽快なものだったというのだ。こうした小太りの裕福なアメリカ人たちが、こうした形で彼らの愛すべき知的伝統を救うことができるのは素晴らしいと考えていること自体が、古典教育の真価に対する無意識の風刺になっているようにミロには思えてならなかった。

ミロの見たところでは、他の保守派たちは、科学に異議申し立てをするという路線をあきらめ、「擬似科学」に対する防御路線に転換したようだ。彼らにとっては、いまだ広く認められるようになっていない知的関心というのは、すべて「擬似科学」ということになるのだが。しばらく彼らは一致してこの路線に固執することになるだろうとミロは思った。というのも、生命というものを数字や有機体に還元してしまうような傲慢で機械的な心理学者や社会学者を嫌っているということでは、文化革命家たちの多くも同じだったからだ。しかしミロは、守旧派の戦いは今後のためにはいかにも邪魔なものだと感じていた。ミロにとっての古典の効用は、理解不可能な牢獄へ彼の知性を閉じ込め、彼の自然発生的な審美眼に足かせをしたということだったが、これぞ学者といった連中にとっての古典の効果もさほどたいしたものだったとは思えない。古典信奉者たちは、古典を忠実に勉強すれば、都会性と知的な能力が自然に備わると考えているようだ。だが、古典にその全学者人生を捧げた教授たちが、彼らの論争のなかでこうした古典教育の成果をいっこうに発揮していないのを見ると、ミロは、結局「古典」と有能な現代的知性との間の因果関係は存在しないという結論に達するのだ。さらに、こうした「昔からの教育」の擁護者たちの中で、批判的活力や創造的な文学作品は絶滅の危機にある今、ミロは「文化」の素材や態度における革命はやはり必要だと感じた。

古い教養文化の擁護者たちの立場は強固なものとはいえなかった。というのも、彼らの敵は、相手の聖地の何たるかも知らずにやたらに冒涇するような不信心の輩たちではなかったからだ。彼らはむしろ、内部から教会を改革しよう

とする文化的な「モダニスト」たちだった。こうした若き破壊者たちは古典の素養をもってはいたが、その平板で捉えどころない表層から逃げ出したのだ。新しい目的や、偏りのない思考基準に身近に接したこうした若者たちは、文化における既得権者や、成功者の証言に頼ろうとする時代遅れの知性の弱点を見透かしたのである。

年長の批評家たちは、現代作家たちのなかで優れたものとそうでないものを識別するという意図をとうの昔に放棄してしまった。こうしたお歴々は自分たちの学術の殿堂であぐらをかいて、散文や詩の若い作家たちをひとまとめにして「アナーキー」で「自然主義的」と呼んだ。そして、論争が後半に入る頃には、ただただ不機嫌で喧嘩腰となり、我々の最良の価値をもはや代表しているといえないような水準を支持すべきだと主張した。ミロの時代には誰もが批評家の不在を嘆いた。しかし、年長の批評家たちには新人を歓迎しようという気分が全く見られなかった。その一方で、新しい批評家たちもまた、ピューリタニズムや俗物主義に対して聖戦を挑むのに必死で、より建設的な方向を指し示す余裕がなかったのである。

ミロは今、一つの時代の終りに立ち会っているとひしひと感じていた。彼と彼の友人たちは古典とプロパガンダという新旧二つの正統派教義から足を洗った。彼らの教師たちの特徴だった堅苦しさや自意識は過去の産物となった。新しい文化は古い文化より個人的なものになるだろう。しかし、それは個人的な財産として所有されることにはならないだろう。各自のなかに自然にわきあがってくる正直な美的感覚を表象すると言う意味で、それは民主主義的なものになるだろう。古い文化的態度は、特別な意味においてのみ民主主義的であった。つまり、その前提となっていたのは、文化的に啓蒙可能な一般大衆に素材を長く効果的に提供し続ければ、ついに彼らとてそれを修得することが出来るだろうという考えだった。しかし、こうした素材は上から提供されたもので、彼ら自身の美的感覚にあわせて鑑賞できるような自由は許されていなかった。こうした条件の下では、批評家と鑑賞家は単に個性を欠いた正統的意見の記録者と

なった。教養のあるひとは、権威的に上から教え込まれたことに自分の判断力を順応させることで、実のところ「群れ」の一員になってしまったのだ。たしかに洗練された群れには違いないのだが、しかし群れであることに変わりはない。批評家を通して語られてくるのは群集の声であって、批評家個人が己の審美眼を信じて下した判断ではない。もちろん、優れた批評家が、信頼できる見識を「群れ」に伝えるということもあるかもしれない。そうした例が過去になかったわけでもなかろう。しかし、ミロの時代にあっては、学校における文学的価値判断は硬直したものになってしまっていた。そこでは生徒は独自の批評眼が示されていると感じたから教師の云うことを信じるのではなく、ただ上から示される意見の重みと権威に圧倒されて信じていたのだった。少なくともミロにはそのように思われた。

今、芸術家たちは慣習にうんざりし、古いものを打ち破って、あたらしくて個人的な形式を作り出したいと考えている。ミロの見たところ、同じように若い批評家たちも、古い文化的慣習を打破しようとしていた。年長者たちにとっては、その結果は単なるアナーキーのように思えるかもしれない。しかし、ミロの態度としては、破壊したいというよりは、素材を新しく並べかえたい思っていた。お下がりの鑑賞はもうお断りだった。自分が夢中になれるようなものだけが、各自の文化的貯蔵庫に収納されるべきなのだ。ミロの理想の学校では、各自の天性の素質に会うような形で、過去に言われ考えられた最良のものと親しむことが奨励されることになる。一度は古い神々を捨てたミロであったが、それらは徐々にではあるが着実に彼のもとに戻ってきた。その中には彼が二度と受け付けられないものもあるが、いつか理解したいと願っているものもある。しかし、偉大な本を書くのに知恵が必要であるのと同じように、偉大な本を理解するのに知恵が必要ではないのだろうか。翻訳の助けを借りて、ラテン語の作家でさえも復活させたいとミロは願っていた。しかし、ギルバート・マレー¹⁰の素晴らしい英訳のなかにエウリピデスの悲劇が凝縮されているのだから、いまさらギリシャ語で苦勞することはなかろう。ミロは古典とプロパガン

ダという二つの正統教義を乗り越えていったのだが、免疫を作るためにウィルスの接種をするように、こうした二つのウィルスをちょっぴり注入することなしには、どんな教育も未完成だと信じるにいたったのである。

現在のアメリカの文化状況をみながら、批評家はどのようなところから出てくるのであろうかとミロは考えてみた。一方では、メンケン氏やドライザー氏、それに彼らの仲間たちが、俗物主義との泥仕合を演じ、厚顔なまでの卑猥さにご満悦のようすで、これは、旧派に属する行儀のいい洗練された若者たちには苦痛を感じさせていた。ミロの見たところ、ピューリタニズムに対して怒り心頭に達したこうした過激な批判者たちは、彼らの敵と同じような頑固さと味気なさをもったモラリストになってしまっていた。彼らは、批評家としてはどうしようもない。他方では、スチュアート・シャーマン氏は、その遅れてきた青年とでもいった熱心さで、最近の作品の「ナチュラリズム」や粗野な表現に対して良心的な反抗を試みている。ただ、シャーマン氏は、純文学つまり文学芸術の優美な伝統を弁護しようとするあまり、もっとも強烈な類のモラリストになってしまい、批評家としては、アーノルド・ベネットのような作家を、熱烈に支持していた。というのも、あの賢い御仁は、人間を常に礼儀作法にかなった妥当な行為をするものとして描いていたから。だから、シャーマン氏の批評も落第ということになる。より不十分だといってもよい¹¹。シャーマン氏の感

10 ギルバート・マレー (Gilbert Murray, 1866-1957)。イギリスの古典学者で、1889年から99年にかけてグラスゴー大学のギリシャ語教授をつとめ、のちにオックスフォード大学で教えた。詩人でもあり、彼が英語に翻訳したギリシャ劇は舞台化され成功をおさめた。

11 ボーンは、概してドライザーを新しいアメリカの文学的な息吹として高く評価し、メンケンのブルジョワジー批判にも当初魅力を感じていた。しかし、彼らは反モラリスト転じて退屈な説教魔になったとの見方も示している。“The Art of Theodore Dreiser,” *The Dial* 62 (June 14, 1917): 507-9. 書評として “H. L. Mencken,” *New Republic* 13 (November 24, 1917): 102-3 などがある。スチュアート・シャーマン

性もまた、ショーリー教授¹²のもっともらしい古典主義と同じくらい時代精神に沿わないものである。本当の批評家を見つけようと思ったら、生の豊穡さとそれに見合った文学形式を本能的に掴み取ることのできる若者たちにのみその可能性があるだろう。彼らは自分たちの受け継いだ文化的遺産に満足してしまわず、現代の世界に積極的に踏み出して行って、自分たちの獲得した新鮮な財産を古いものに重ね合わせることになろう。こうした若者はとりすました気難し屋でなく、「動物」と「人間」の行動の微妙な差異に拘泥することもなく、マーク・トウェインにもゴーリキーにもロマン・ローランにも夢中になれ、同時に、コポー¹³の舞台にわくわくするのである。

文化を創り出すためのより良いプログラム、いかなる種類の文学的芸術にもふさわしいプログラムはどこに求められるのだろうか。ここでいいたいのは、生きた試みとしての文化のことである。すなわち、誠実な表現を求め、そうした表現に出会ったときには、その本質を理解しようとする現在進行中の試行としての文化である。「自分にはどんなものが好きかわかっているさ」とか、教科書で習った通り芸術の良し悪しをわかっているといったこととはまったく違った次元の鑑賞のことをいっているのである。もし、各々の知性がこのような考えにしたがって自分自身の文化の構想を模索すれば、おのずと合意点はでてくるのではないだろうか。アメリカの詩の傾向を概観したエイミー・ローウェル

↘ (Stuart Sherman) は、アーヴィング・バビットやポール・エルマー・モアの弟子で「ニュー・ヒューマニスト」の陣営に属していた。

12 ポール・ショーリー (Paul Shorey)。シカゴ大学のギリシャ語教授。ボーンはこれに先立って、ショーリーが現代的傾向に対して古典教育を擁護したとき、彼を「生涯をかけた仕事(ビジネス)を守ろうとした怒れる教授」として攻撃した。
 “An American Humorist,” *The Dial*, August 30, 1917 を参照せよ。[Resek 注 2]

13 コポー (Jacques Copeau) はフランスの劇場プロデューサーで、当時、アメリカの舞台デザインに影響力を強めつつあった。[Resek 注 3] なお、Resek の注はコポーが二度目に言及されるときに付されているが、読者にわかりやすいように最初の言及箇所に移した。

は、その中で、同時代の男女の伝統との戦い、そして知的な衒いとの葛藤を明らかにした。こうしたローウェルの試みは好ましいものであると、ミロは主張した。彼は、詩人たちの新しい階級意識が育って行く中で、「教養」があるかないかによって作られた選民と異教徒との間の古い溝がなくなっていくのを感じ始めていた。今我々は、労働者や同じような気質と美的感覚をもった読者たちの小グループを作っていく途上にある。次々と創刊された小雑誌は、こうした新しい感性の共同体の声を代表するものだ。粗野な民衆をおぞましいと感じるメンケン氏や、まともな正真正銘のアメリカらしさにこだわっているシャーマン氏の影響力を弱めるためにも、多分はじめのうちは、他の連中にたいして一時的に高慢ちきな態度を取ることは正しいのだとミロは考えていた。自由の名のもとに俗物主義と戦ったり、心暖まる人間観の名のもとに卑猥な異端者と戦ったりする代わりに、わかりあえる自分たちの仲間のために書くほうがいいのかもしれない。このようにして何か本物のものを生み出すことで、「ブルジョア」一味や群雄割拠している獐猛な破壊者どもの双方に自分達の実在感を示すことになるかもしれない。こうした極めて自意識的なグループの中の喧嘩のほうが、『アトランティック』や『ネーション』を埋めつくしているうんざりするほど時代遅れの争点よりもはるかにましである。「文化」を志す知性のためには、「順応したり崇拜したりしてはいけない、むしろ自分自身のグループ、つまり同じような感性をもつ気質の共同体を探し求め、仲間との共感に満ちた接触を通して鑑識眼を深めなさい」と忠告されるほうが、はるかによいことなのである。

もはや他の国の作品に対して好意的な眼差しを注ぐかどうかという問題ではない。ミロは今日、出版社の(翻訳)企画によって、全世界が眼前に広がってきたような気がする。ミロとその友人たちは、自分たちの国の多様な「将来性のある作家たち」に対してよりも、フランスやロシアの幾つかのグループに対して共感を覚えていた。アメリカ作家ウィストン・チャーチルの方がロシアのアルツィパーチェフ¹⁴よりもむしろ異邦人のように思えてきた。文化が国際的

であるという事実がまずあって、次にそれが実感としてそのように受けとめられるようになるものだ。古い文化的態度は外国文化を歓迎したが、それは「比較文学」のかたちで異質の文化を輸入したのである。自分たちの美的感覚を外国の正統的文学の基準に合わせて鑄造しなおそうとすることで、外国文化は受容されたのである。年長のアメリカの批評家は多くの場合、自分たちが借用したものに妥当な地位と尊敬を与えることに関心をもってきたのだ。新しい批評家は自分の感性の共同体にぴったりなものを受け入れることになる。彼は、外国の文学基準をそのまま自分たちのものにするのではなく、彼や其の友人たちの文学的試みと親近性のあるグループと提携しようとするだろう。アメリカ人は心血を注いで、自分たちが肌で知っている生活を解釈しその形を描く必要がある。アメリカ人作家が、彼の芸術の素材を、自分たちがその中にどっぷりと浸かっている生活、独自の問題を孕み独自の色彩をもつ生活とは別のところに求めるならば、彼は国際的にはなりえないだろう。しかし、もし「若い世界」のある種の希望にあふれたビジョン、そして、戦争で傷つき反旗を翻す世界中の若者が賛同するようなある種の理想的な価値観と手と手を携えて進もうとするならば、アメリカ作家は国際的になるだろうし、ならなければならない。

ミロは時々、自分が今向かっている方向は、一つの弧を描くように出発点に戻って、新しい古典主義へと彼を連れ戻すことになるのではないかと考えることがある。教養人の歴史の最後の段階は、彼が理解できず、其の若き知性がそれを振り払うことにのみ力を注いだあの「古典」であるのかもしれない。しかし、それはアメリカという世界の中で、あんなに聡明ではないやりかたで彼に伝えられたものとは全く違う古典主義になるだろう。それは吟味され、生きる糧になるようなものになるだろう。将来を展望して、彼は、ヴァン・ワイク・

14 ミハイル・ペトロヴィチ・アルツィバーチェフ (Mikhail Petrovich Artzybachev, 1878-1927) はウクライナのハリコフ県生まれのロシア作家。彼の小説『サーニン』は 20 世紀初頭には国際的な評価を得た。

ブルックスが「使用可能な過去を発明する」と形容したまさにその事業に取りかからなくてはならないだろう。アメリカの伝統の中には、無理やり甘ったるい味付けや明るい色調を与えられていないもの、ブルジョア社会の身の毛のよだつような庇護という重荷を背負っていないものはわずかしかない。だからこそ、新しい古典主義者は、今後ソローやウィットマンやマーク・トウェインを救い出し、彼らから豊かな活力と倫理的自由からなる永遠の人間の伝統の樹液を搾り出し、我々の未来を築かなければならない。もし、古典とは、節度ある力、調和を伴った活力、知性と感情の融合、芸術的良心の鋭い感覚を意味するならば、これから生まれ出ずる革命的な世界は古典的なものになるだろう。ミロは、『マッシズ』¹⁵に集まる知性の背後に、形式と表現豊かな美を求める情熱を感じたし、こうしたラディカルたちがジャック・コポーに心酔し、チェーホフを読むのを満足げに眺めていた。そして、自分たちの時代はもう終わったことをまだ知らないアメリカの批評家たち——老いも若きも——のことを思って、そっとほくそ笑むのだった。

15 『マッシズ』(*The Masses*, 1911-17)は社会主義者ペート・ヴラグ(Piet Vlag)によって創刊された。1912年頃からの数年間、ジョン・リード(John Reed)、マックス・イーストマン(Max Eastman)、フロイド・デル(Floyd Dell)などが編集に携わり政治と文学を結合したラディカルな雑誌として黄金時代を迎えた。しかし、1917年8月には、最後の号となる7月号に反戦的な記事とイラストが掲載されているとして、防諜法(Espionage Act of 1917)に基づく郵送許可取り消しの処分を受け、事実上の発行停止に追い込まれた。

